

地域に潜在する自然や文化を活かした
放課後の体験活動の展開に向けた
取り組み

平成20年3月

NPO 法人 自然体験活動推進協議会

目次

事業報告

里の子・街の子たんけんプロジェクト（茨城県つくば市／東京都新宿区）	01
もりの子たんけんプロジェクト 戸隠再発見の旅（長野県長野市戸隠）	07
ステップスタート（長野県下伊那郡泰阜村）	15
里棚田の夜なべ仕事人！「田圃から生まれるものは捨てるものなし」 ～古事記を紐解きながら～（徳島県勝浦郡）	19
自然体験活動を行う際の指導者の役割	27

里の子・街の子たんけんプロジェクト（茨城県つくば市／東京都新宿区）

(1) 事業概要

事業名：里の子・街の子たんけんプロジェクト

テーマ：都市(街)に暮らす子どもたちを対象に里山での自然体験活動を実施し、身近に豊かな自然がある暮らしについて学んだ上で都市(街)を実際に歩くことで都市(街)の自然がもつ魅力を発見する。そして里山からの学び、自分たちの暮らす都市(街)への気づきを踏まえて、子どもたち自身による理想の都市(街)を考える。こうした活動を通して子どもたちの豊かな想像力とコミュニケーション能力を育てるとともに地域への愛着と街づくりに向けた視点をはぐくむことを目指す。

○里の子編○

開催日時：2007年12月15日(土)09:00～17:00

開催場所：つくば豊里ゆかりの森（茨城県つくば市）

スタッフ：東京からのスタッフ2名 茨城現地スタッフ3名

参加者数：子ども12名 保護者2名

広報活動：主に小学校へのチラシ配布

参加費用：小学生2,000円、中学生・大人4,500円

地域特性：つくば市は1970年代より国や民間の研究施設や大学が集まる研究学園都市として発展してきた。また、3年前に開通したつくばエクスプレスにより都心から1時間程度でアクセスできるようになり、休日には筑波山への登山客など、豊かな自然を楽しむ人々が集う地域となっている。つくば豊里ゆかりの森（茨城県つくば市）は敷地面積12haのアカマツとクスギの平地林の自然公園で、カブトムシやクワガタムシ、アゲハチョウなどの昆虫採集や観察もできる。夏の夜にはホタルも飛び交い、小鳥のさえずりを聞くことのできる自然豊かなフィールドを持つ。ゆかりの森の中には、昆虫館、宿泊施設「アカマツ」、など様々な施設があり、豊かな自然体験活動を提供している。

○街の子編○

開催日時：2008年1月26日(土)13:00～17:00

開催場所：花園公園及び新宿御苑周辺（東京都新宿区）

スタッフ：東京現地スタッフ4名

参加者数：子ども6名 保護者1名

広報活動：主に小学校へのチラシ配布

参加費用：小学生200円。中学生・大人400円

地域特性：花園公園は小さい敷地ながらも多様な側面をもつ都市公園である。平日の夕方までは花園小学校の校庭として分けられ時間帯によって二つの顔をもち、花園小学校の児童をはじめとする地域住民や、周囲で働いている人々の憩いの場となっている。また新宿御苑からほど近い場所にあることで大都会の中にありながら鳥やチョウが飛来する場所ともなっている。

主催：NPO法人自然体験活動推進協議会

主管：社団法人日本ネイチャーゲーム協会

(2) 放課後活動事業のプログラムについて

○里の子編○ 12月15日(土) 8:40~17:00

プログラムの テーマ・ねらい	【里の恵みを食べよう！】 里の自然を満喫する自然体験プログラムやそば打ち体験を通して、街 の中では味わえない里の自然を街の子どもたちに体験してもらう。
-------------------	---

時間	内容	場所
08:40	集合	秋葉原駅
09:10	秋葉原駅出発 (つくばエクスプレス)	
10:40	つくばゆかりの森到着 そば打ち体験	つくばゆかりの森 工芸館
12:00	昼食 (そば)	
13:00	里の自然満喫プログラム <ジャンケン落ち葉集め> <同じものを見つけよう> <ごちそうはどこだ>	
15:00	つくばゆかりの森発	秋葉原駅
16:40	秋葉原駅到着	
17:00	解散	

※< >はネイチャーゲームアクティビティ

そば打ち体験



初めてづくしのそば打ち体験。先生に手伝ってもらいながら、がんばっています。ちょっと疲れてしまいましたが、手作りのそばをおいしくいただきました。

<同じものを見つけよう>



<ごちそうはどこだ>



里ならではの自然物探しの後は、いっぱい集めたドングリを使って遊んでリスの習性を体験し、里に生きる生きものの暮らしを考えました。

○街の子編○ 1月26日(土) 13:00~17:00

プログラム の テーマ・ねらい	街の子どもを対象に、街の中を探検し、見つけたものでマップをつくることで、住んでいる街の自然を再発見し、地域への愛着と街づくりに向けた視点をはぐくむ。
-----------------------	--

時間	内容	場所
13:00	集合 アイスブレイク ＜動物交差点＞	花園公園及びその周辺
13:30	花園公園や周辺の街の自然をたんけん ＜ディスカバーウォーク＞	日本ネイチャーゲーム協会
15:30	ぺたぺたマップづくり	
16:00	見つけたものをみんなで教えあいつこしてみよう（マップの発表）	
16:30	ふりかえり	
17:00	解散	

※＜ ＞はネイチャーゲームアクティビティ

＜ディスカバーウォーク＞とぺたぺたマップづくり



花園公園から新宿御苑、新宿御苑沿いの緑道をぐるっと一週しての街の自然、魅力を探し。地域の人とリスザルとの交流などたくさん見つけた魅力の中から、よりすぐった発見を地図にぺたぺた貼ってもらいみんなの発見をわかちあいました。



(3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について

いずれの地域での実践においても地元で詳しいスタッフの確保が重要であり、また受入先との連携なくしては都会の子どもたちを地方に連れて行くことは難しいことがあらためて感じられた。今回は、つくば市の現地のスタッフにお願いしてこのフィールドの、この季節ならではのプログラムを提供してもらうことにより、里の自然を満喫するというねらいにつなげることができた。また、里の自然が敏に暮らす子どもたちをととても惹き付けるものであることがスタッフに共有され、地域外スタッフだけでなく、地元スタッフにとっても地域のフィールドの価値をあらためて見直す機会となった。

今後、継続的に事業を進めるためには、地元スタッフが主体となって企画運営を行い、受入れ地域外のスタッフが広報などの支援を行うなど、役割分担を行うことによって効果的な活動を展開できるだろう。また今後の地域内指導者の育成の方向としては、里の自然の魅力を季節を通じて安定的に提供するための企画、運営を学ぶことによる個々のスキルアップが重要である。またもう一点としては、バラエティにとんだ飽きさせないプログラムづくりを目指し、地域の主体間の連携によるたくさんの地域住民による協力体制ができることが望ましい。これにより、よりいっそう地域のフィールドの価値を高め、活かしていくことができるだろう。

同様に街の魅力を子どもたちに伝えるうえでも、自治会などの地域内の大人の集団から、街の魅力を伝えられる大人を発掘していくことが重要である。しかし街というフィールドにおいては街の自然へ目を向けている大人は決して多くはなく、自然体験をはじめとする体験活動は地域の外にあるものとしてとらえられがちだと考えられる。今回、子どもたちと一緒に街を歩くことで、指導者という立場の大人でさえも子どもの視点から多くの気づきを得ることができたが、こうした地域の魅力やそれを発見する喜びを地域に暮らす（通う）大人たちとも共有することが、身近な自然における自然体験のニーズを高めるとともに、事業にかかわる大人を地域内から発掘していくことにもつながり、地域住民を主体とする子どもの体験活動実践が広がっていくと考えられる。

(4) 安全面への配慮について

○里の子編○

- ・プログラムの中で、森の中に落ちているもの（落ち葉や木の実）を拾ってくる活動があるので、触るとかぶれるものなどの危険物を把握し、活動場所を変えるなどあらかじめ危険を避けることで安全面の配慮をした。
- ・下見の時に足がはまるほどの目立たない穴が数カ所見つかったため、移動の時やプログラムの最中に注意を促した。
- ・会場までの移動において、次の点に配慮した。バスや電車の乗降車時などのポイントで子ども的人数をチェックする。またバスの停留所で待っている時やバスからおりる時に道路に飛び出さないように注意する。

○街の子編○

- ・道路を渡る場面が何カ所かあったので、スタッフが先頭と最終尾について、安全に細心の注意を払った。
- ・ガラスなどの危険物を誤って拾わないように、注意を促した。
- ・グループがバラバラにならないよう固まって行動するように子どもたちに伝え、グループ行動時には必ずスタッフがつくようにした。

(5)参加者、指導者の感想など

○里の子編○

参加者からの感想として「そば打ちは、はじめ大変だったけどだんだん楽しくなっていた」「栗やドングリなど、自分の家の周りにはあまりないものがいっぱい落ちていた」といった、里での体験への驚きと発見が聞かれた。また、指導者からは「子どもたちに里の自然を満喫してもらえてよかった」「今度は、カブトムシのいる夏場にぜひ遊びにきてほしい」などの感想が聞かれた。

○街の子編○

参加者からは「食べられるドングリなど知らないものも、あってびっくりした」という感想や、「最後の葉書づくりが楽しかった」など、普段の生活ではふれられない自然のおもしろさと、自然物を使って体験の思い出づくりができたことへの満足した感想が聞かれた。また、指導者からは「自分と子どもの視点が全く違うことにあらためてびっくりし、子どもから教わるが多かった」など、指導者自身がこの活動を通して発見し、びっくりした様子が見られた。

(6)本事業の成果、今後の課題

<成果>

- ・子どもたちが身近にある里の豊かな自然を満喫しつつ、それとは違った街の自然の魅力を発見するという事業のねらいを達成できた。
- ・指導者にとっても「大人と子どもの視点の違い」への気づきを得られるなど、指導者にも成果をもたらすことができた。

<課題>

- ・同じフィールドで季節を通したプログラムを展開することで季節のうつりかわりとともに両フィールドの自然を見比べることができ、更に多くの発見につなげることができる。
- ・プログラムを担当するスタッフを多く確保できると、多様なプログラムを展開できる。また里ならではの、街ならではの文化、伝統に根ざしたプログラムの提供を行うことにより、より地域の魅力にふれる機会を提供できる。
- ・街に暮らす子どもたちと里に暮らす子どもたちの相互交流を行うことにより、活動の幅を広げることができる。

- ・街づくりへの取り組みとして十分なプログラムを展開できなかったが、回数を重ねることによって体験を深め、新たな気づきへつなげることにより実現させられると考えられる。

(7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて

里の子たんけんプロジェクト、街の子たんけんプロジェクトの2事業を組み合わせで開催したが、いずれについても参加者からは好意的な反応が得られた。ただし、これらはイベント的なものであり、こうした活動の継続がいかに都市(街)における子どもの居場所づくりへとつなげられるかが重要である。

現代の小学生は学年があがるほどに習い事などで忙しくなっている。その合間にいざ遊びにいこうと思っても、人の目が行き届かないような公園や緑地には子どもだけでは遊びにいかず、日常的な自然とのかかわりは決して多くない現状がある。そのため現代に求められる“子どもの居場所”は、公園や緑地があるだけではその役割を果たせなくなっており、子どもたちが安全に過ごすことのできる場所であり同時に保護者が安心して子どもを預けられる場所であることが条件となっている。

子どもたちを自然体験の場へと連れて行こうとするときには今回のような自然への気づきを促すイベントはよい機会であり、また本事業を継続的に実施することでより一層子どもたちに地域の魅力を伝えることにもつながるだろう。しかし本事業の両プロジェクトに参加した保護者によると「知らない団体」には子どもを参加させることの怖さがあり、これまでに関わりのあった指導者が引率することが大きな安心となっていたようだ。また同時に自分たちも参加したことがないイベントは、友だちを誘いづらいことからの参加しにくさがあり、これは地域内で実施されるイベントにおいても同様のことが起きていると考えられる。

地域における子どもたちの自然体験の機会をつくるには、親同士、子ども同士が誘いあって出かけられる状況が望ましく、そのためには信頼できる団体や地元組織による継続的かつ積極的な“大人の目が届く”子どもの居場所づくりを行っていくことが必要となる。

本事業は子どもたちに身近な自然への気づきを促す効果をもっていた。一方で子どもたちを見守る側である大人が地域の自然を見直しその魅力を確認し、子どもたちが安心して過ごせる場づくりへの意識をはぐくんでいくことが重要である。地域の教員や自然体験活動指導者をはじめとする教育者、また児童保護者など地域の多様な大人たちの協力のもと、地域の教育力の向上という視点から子どもの居場所を整備していくことが求められている。こうした目標への一助として地域の主体である大人を巻き込んでいくことが、この事業を今後も継続していく上で重要なねらいとなるだろう。

もりの子たんけんプロジェクト 戸隠再発見の旅（長野県長野市戸隠）

(1)事業概要

事業名：もりの子たんけんプロジェクト 戸隠再発見の旅

テーマ：長野県長野市戸隠地区に小学校が3校あったが、市町村合併により統廃合され、現在、戸隠地区には1校のみの小学校となった。これにより児童はスクールバスでの登校となり、通学路における児童の自然体験の機会がなくなってしまった。そこで通学路という場から、地域の自然環境を見直し、自然や文化、歴史的な資源を改めて発掘することとした。

開催日時：2007年11月17日(土)13:30～18日(日)11:30

開催場所：長野県長野市戸隠（上信越国立公園内）

スタッフ：指導員5名 そば打ち講師2名

参加者数：戸隠小学校児童6名

広報活動：戸隠小学校の全校生徒、過去の行事参加世帯にチラシ配布、地元の協力者からのよびかけ

参加費用：1,200円

地域特性：戸隠は上信越国立公園をはいする豊かな自然環境を持っており、霊山・戸隠山の麓に、奥社・中社・宝光社・九頭龍社・火之御子社の五社からなる、創建以来二千年余りに及ぶ歴史を刻む戸隠神社があるなど、歴史的文化財が数多く存在する。本事業では、この地域の中心的な場所である戸隠中社地区を主な実施場所とした。この戸隠中社には旧戸隠小学校宝光社分校の通学路でもあった、中社から宝光社へ続く神道（かんみち）と呼ばれる古道がある。この道はNHKが放送開始時に流す小鳥の声を収録した実績があるなど、鳥の宝庫ともいえる豊かな森の中にあり、自然体験活動プログラムの効果的な実施により創造的な発見を期待できる場として選択した。また戸隠は竹細工やそばなど自然からの恵みを得た古い文化が残っている地域であり、ネマガリダケやそば畑など特産品を支える自然環境や農業が残っている。一方、戸隠の民家に使用されていた茅葺屋根の民家は減少し、かつてそのカヤを育てていた場所であるカヤ場が、現在ではその役目を終えシラカバなどの木々が生い茂る林となっている。本事業では1日目にこのカヤ場を利用し、かつて茅があったことと、その役割を学んだ。

主催：NPO法人自然体験活動推進協議会

主管：社団法人日本ネイチャーゲーム協会

(2) 放課後活動事業のプログラムについて

1 日目 11/17(土) 12:00～

プログラム の テーマ・ねらい	<p>【地域の歴史を自然から知る】 かつての茅葺共同作業の場(カヤ場)を訪れ、自然体験活動を通して自然の中にある不思議さを発見するとともに、地域の歴史を学ぶ。</p> <p>【地域の食を知り、受け継ぐ】 戸隠の名産であるそば打ちを体験し、そば打ち職人からその技術と歴史も学んで食文化を体感し継承していく。</p>
-----------------------	--

時間	内容	場所
13:30	アイスブレイキング 吸血モスクイート <ジャンケン落ち葉集め> <木のフィールドビンゴ> <ごちそうはどこだ> カヤ場学習	越水ヶ原カヤ場 (戸隠中社所有林)
17:00	<そば打ち体験>	蕎麦の館山口屋
19:00	夕食 (そば)	戸隠高原自然学校
20:00	入浴	
21:00	就寝	

※ < >はネイチャーゲームアクティビティ

【自然のつながりを体験し、地域の歴史を知る】

フィールドの特性を知り、自然のつながりを理解し、地域の歴史を考える材料となる体験を得るためにネイチャーゲームを活用した。

<木のフィールドビンゴ>ではビンゴのマスに描かれている様々な木の特徴を探し、フィールドにある木の特徴や特性を理解した。そして今年豊作のミズナラのドングリを各グループで集めて



一本の木を中心に木の根元や、土の中、枯れ葉の下などにドングリを隠し、

違うグループが隠したドングリをお互いに探し、見つかったドングリの数を



数えていく活動である。アクティビティの目的は、動物の貯食を学び、森の中にあるいのちの循環を体験することにあるが、これらの活動によって現在のカヤ場の植生とそこに暮らす動物を確認することができる。その上で、カヤ場が過去にはどのように利用されていたかを知り、地域の人々の協力体制に支えられ維持されてきた地域文化の特性を知る機会とするとともに、現在、カヤが使われなくなった理由を理解し戸隠の歴史と自然とのかかわりを知る。



【地域の食を知り、受け継ぐ】

カヤ場では、過去の歴史から近代に移る過程で、受け継がれなくなった地域の歴史を学んだが、そば打ち体験では、今もなお受け継がれていく食文化について学び体験した。



現在の戸隠そばは、戸隠中社を中心とし店舗が並び、全国的にも広く知られている。そばを打つ大半は「男」であるが、家庭でそばを打ち夕食とするのが本来の姿であり、各家庭では祖母、母の役割であった。現在は家庭でそばを打つ姿も食の多様化によって年々姿を消していつている。そこで児童にそば打ちを体験してもらうことで、戸隠の食文化を継承する機会とした。



ここでは、そば打ち職人から技術指導があったが、児童のそばを打つ手つきがとても良く、児童からのコメントを集めると、家で年に数回は祖母がそばを打つ姿を見ていて、その姿をイメージしながら真似てそばを打っていたことがわかった。家庭や地域を通じてそばにふれる機会がある児童に、児童自身がそばを打つ機会をつくることで食文化への一層の親しみをはぐぐむことができる。



2日目 11/18 ～11:30

プログラム の テーマ・ねらい	【自然の不思議さ楽しさに出会い、戸隠の豊かな自然に気づく】 バス通学によって通学路を歩かなくなった現在、改めて道を歩くことで、自分たちが住む戸隠の豊かな自然に気づく
-----------------------	---

時間	内容	場所
7:00	起床	戸隠高原自然学校
7:30	朝食	
9:00	<ディスカバーウォーク> <動物カテゴリー>	神道 戸隠高原自然学校
11:30	終了	

※< >はネイチャーゲームアクティビティ

【自然の不思議さ楽しさに出会い、戸隠の豊かな自然に気づく】

通学路での地域の豊かな自然をさがすために、ネイチャーゲームの<ディスカバーウォーク>を取り入れた。<ディスカバーウォーク>は、コースやその周囲にある自然の特徴や変化、また歴史的なポイントが落とし込まれた地図を使った活動である。参加者は地図を持って歩きながら、ポイントを探していく。そうすることで、地域にある自然や特性を知るとともに、新たな気づき、発見を得る機会となる。



指導員は、下見においてポイントを具体的に絞り込み、「特徴的な植物」「戸隠の歴史がわかる場所」「動物の痕跡」「季節ならではの特徴」「発見を促し、植物の不思議さを理解できるもの」などを地図に落とし込んだ。当日は、参加者が歩く道に「楽しそうなもの、不思議なものが隠されている」という投げかけを行い、それらを探ることへの期待と好奇心を呼び起こした。雪混じりの雨の中での活動となり、時間を短縮することになってしまったが、それでも参加者は歩く速度をゆるめては地図のポイントを探し、歩く道の自然の豊さ、不思議さ、面白さを発見していた。



(3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について

戸隠には自然体験活動が盛んな背景がある。この地域の自然体験活動としては「戸隠ネイチャーゲームの会」、「ボーイスカウト」が地域の自然を素材にした活動に取り組んでいる。また、社団法人日本ネイチャーゲーム協会も、長年にわたり自然教室を実施してきており、指導者育成のフィールドとして活用してきた。



戸隠観光協会でも、観光資源として今ある自然を有効活用する動きが見られ、催事、祭りにも自然の要素が取り入れられている。また厳しい山岳地帯の戸隠連峰を有することから組織されている戸隠遭難対策協議会の、地域の自然、地形、特徴に精通しているメンバーも、地域の子どもたちの現状把握において「自然とのふれあい」の減少を気にかけている。こうした地域の人々から通学路での子どもたちの自然とふれあう機会が減っているという話があり、今回の事業実施へとつながった。

それぞれの地域団体が連携するようつながりはまだ存在していないが、本事業では各団体から情報を得ることによって協力関係ができ、地域の問題点、事業実施にいたるまでの経緯を共有する機会となった。

今後期待されることは、これらの地域団体が子どもの体験型環境学習、子どもの支援活動を軸に連携することで指導者を発掘することによって、地域の活性化の効果を含む指導者育成プログラムが構築されることである。

(4) 安全面への配慮について

【地域情報を得る】

本事業を実施するにあたり、安全面についてフィールドの下見、地域情報を収集してきた。特に近年熊が里に下りてくることが増え、参加者の保護者からもこれに対する不安の声が聞かれた。戸隠遭難対策協議会隊長から今年の熊の情報を得て、フィールドを選定するとともに、スタッフ間では、熊に対する正しい知識、対処を共有してきた。

【安全管理トレーニング】

また、下見時で安全管理としてフィールドワークを重ね研修した。フィールドにおける、「危険予知トレーニング」を実施し、起こり得る危険を地図化していく作業を繰り返した。指導員それぞれが感じ取った危険箇所を共有することで、指導体制を強化するとともに、指導にあたる際の指導員の不安を払拭することも狙いにあった。

【安全への対応を共有】

事業を実施する際、安全管理について共有し、スタッフの連絡経路を確保した。また起こり得る事故を想定し、発生時におけるリーダーの役割について確認を行った。安全対策には、スタッフと参加者の間での共有事項を伝えることも重要であり、第一歩として「子どもたちとの約束事」を参加者と確認した。

- 1.人の話をよく聞く
- 2.自分のことは自分でする
- 3.無理はしない

(5) 参加者、指導者の感想など

参加者の感想を以下にまとめた。これら感想は、事業の最後に行ったふりかえりでの参加者のコメントと事業実施中及び実施後に指導者からもらった感想をまとめたものである。

【参加者の感想】

「そば打ちが上手くできた。おばあちゃんのそば打ちを見ていたからだと思う」

「ドングリがたくさんあって、動物が森を育てたんだと思った」

「学校へ行く道が楽しそうに思えた」

「戸隠に生まれてよかったと思った」

「お母さんも連れてきたい」

「そばがおいしかった」

「知らないことがいっぱいあって楽しかった」

「ネイチャーゲームをもっとやりたい」

「〇〇ちゃんがいっぱい虫を知っていた」

「おそばを家で作りたい。僕が（家族に）教えてあげる」

【指導者の感想】

「さすが戸隠の子。都会の子と比べてそばの打ち方をよく知っている。戸隠の食文化を継承していけるようにがんばっていきたい」（そば打ち講師）

「戸隠の子どもが年々自然の中で遊ばなくなっていく傾向にあることが心配であり、こうした事業を通じてもっと自然とふれあう機会を作っていきたい。そのソフトとしてネイチャーゲームは有効だと思ったし、戸隠の地形にあっている」（そば打ち講師）

「そば打ちのとき、子どもたちがやり方を教えてくれたのにはびっくりした」（指導員）

「子どもたちが、普段から自然のことをよく見ていることを実感した。自然への興味や好奇心を絶やさないようにしたい」（指導員）

「元気があってよかった。＜ディスカバーウォーク＞は短かったけれど、色々と発見をしてもらえてよかった」（指導員）

「事故がなく終了できたのは、地域の方からの情報が確かなことがある。スタッフ間の連携がよく取れていたのも、子どもたちも安心できていたと思う」（指導員）

(6) 本事業の成果、今後の課題

本事業の成果、今後の課題を以下のとおりにまとめた。

① 活動の成果

- ・ 参加者人数は少なかったが、子どもたちの感想が行事趣旨のねらいに合致するものだった。
- ・ 安全面からみれば事故がなく終了できた。
- ・ 地域の指導者の協力を得られた。これからにつなげられると感じられた。

- ・ 知識ではなく、身体と感覚を使うなどにより体験を深められる活動となったこと。
 - ・ 自然体験と歴史とを関連づけたプログラムを展開できたこと。
- ② 活動が参加者に与えた効果
- ・ 自分たちの身の回りに豊かな自然があると認識できた。
 - ・ そばの食文化が自分の暮らしの中にもあると認識された。
 - ・ かつての通学路には自然が豊かにあったことが認識された。
- ③ 活動が指導者に与えた効果
- ・ 指導を通じて、戸隠の自然、人とのつながりがもてたこと。
 - ・ 安全管理・対策を通じてきめ細かい運営の大切さが理解できたこと。
 - ・ 地域特性を活かしたプログラム展開には、地域内の連携の大切であることが理解できたこと。
 - ・ 子どもたちを見守る意識とこれまでに地域の人たちが担ってきたそうした役割が再確認された。
- ④ 今後の課題
- ・ 事業にかかわる団体を連携させること。本事業をその礎とすること。
 - ・ 持続可能な地域作りの本質を一過性のものに終わらせないこと。
 - ・ 自然や歴史を地域資源としてさらに有効利用していくこと。
 - ・ 地域資源を外（観光客）だけではなく、内（地域）にも活用すること。
 - ・ 地域の若い指導者を育成していくこと。

(7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて

本活動は、自然と歴史の2つのテーマをつなげている。これらは地域資源の大きな特徴を捉えたものだが、地域資源の活用、発展には人材の登用が鍵となる。先にあげた各団体（戸隠観光協会、戸隠ネイチャーゲーム地域の会、ボーイスカウト、戸隠遭難対策協議会）が連携し、それぞれの得意分野を生かしていくことで、戸隠の資源をさらに有効に活性化できる可能性がある。他にも、歴史考察の視点で見れば、戸隠社務所を中心とした活動も重要である。そこには、子どもの神楽や太鼓、祭事があり歴史文化の指導的な立場としての上記の人たちのかかわりがある。また工芸分野では竹細工が盛んであり、竹細工組合が子ども支援として竹細工の技術体験を行っている。これらはまさに地域資源の活用であり、まだ多くの地域の人が生業として伝承された知恵、技術をもっていることから、こうした文化体験の機会を広げていける可能性がある。さらには自然と接した生活をしている戸隠独自の生活の知恵もまた地域資源としての価値を有していることであろう。

確かに通学路がなくなるなどにより、子どもたちが日常的に自然とかかわる機会や、歴史を知り体験する場が減少していることは否めないが、本事業の取り組みは、地域の子どもを支援する活動の多角化、明確化につながることから、戸隠の地域資源の価値を再確認し、向上させることにつながると考えられる。地域資源の価値の向上は地域住民が指導者として役割を果たす機会を生み、地域の住民の参画がかなうことで、持続可能な地域づくりの指標となりえる事業へとつながっていくという期待が持てる。

現在、戸隠の自然や歴史を知る「戸隠遊行塾」があり、毎月地域の有識者が観光客向けに企画を展開しているが、そこには地域住民が多く参加している。地域を知ることが地域資源の確認及びその継承を促す機会となるものであることから、次年度以降も本事業のような地域資源を活かす取り組みが展開される際には、よりいっそうの地域住民の協力を得ることができるであろう。子どもの体験活動支援が地域全体の取り組みとして発展していくことが期待されており、こうした取り組みをいかにして子どもたちの健全育成へとつなげていけるかが課題となっている。

ステップスタート（長野県下伊那郡泰阜村）

(1)事業概要

事業名：ステップスタート

テーマ：本事業では、この地域特性を踏まえて小学生が卒園生の手をとり、入学前に彼らに通学路の危険・楽しみスポットを伝えることで、①子ども達の安全意識の向上、②楽しい通学スポットの伝承、③子どもどうしのコミュニケーション促進、④基礎体力づくりの4つを培うことを目的に、小学校・保育園とGWの三者及び、教育委員会、地域住民が連携して実施した。

○泰阜北小学校区○

開催日時：2008年2月5日(火)15:10～17:00

開催場所：泰阜村北小学校から、児童家までの通学路。（長野県下伊那郡泰阜村）

スタッフ：北保育園職員1名 北小学校職員8名 地域指導者4名、地域住民多数

参加者数：北保育園児4名 北小学校全校生徒59名

広報活動：保育園児と小学生の保護者へは、小学校及び保育園を通じて案内のお便り配布
地域住民へは、当自然学校が発行する村内広報誌に案内を記載すると共に、前日の村内ケーブルテレビ広報にて案内を流す。

参加費用：なし

地域特性：泰阜村の通学路は、高低差があり曲がりくねり、道幅が狭く車道と歩道の区別がない道路や、転落事故の危険性がある箇所も少なくない。また、一方で道端には田畑など地域の生活文化や豊かな自然環境が存在する。

○泰阜南小学校区○

開催日時：2008年2月13日(水)16:00～17:30

開催場所：泰阜村南小学校から、児童家までの通学路。（長野県下伊那郡泰阜村）

スタッフ：北保育園職員1名 北小学校職員8名 地域指導者4名、地域住民多数

参加者数：南保育園児5名 南小学校全校生徒51名

広報活動：保育園児と小学生の保護者へは、小学校及び保育園を通じて案内のお便り配布
地域住民へは、当自然学校が発行する村内広報誌に案内を記載すると共に、前日の村内ケーブルテレビ広報にて案内を流す。

参加費用：なし

地域特性：泰阜村の通学路は、高低差があり曲がりくねり、道幅が狭く車道と歩道の区別がない道路や、転落事故の危険性がある箇所も少なくない。また、一方で道端には田畑など地域の生活文化や豊かな自然環境が存在する。

主催：NPO法人自然体験活動推進協議会

主管：NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター

(2) 放課後活動事業のプログラムについて

○泰阜北小学校区○ 2月5日(火)15:10~17:00

北小学校では、普段より安全についての学習を学校で行っており、児童の安全意識は高くある。当日は、卒園生の居る地区の児童と一緒に下校した。その他の地区の児童は集団下校をした。

実施当日スケジュール

15:00	保育園児が北小学校に集合	
15:10	オリエンテーション	
15:20	集団下校の実施	
17:00	事業終了	

○泰阜南小学校区○

2月6日(火) 南小学校の朝の会 (8:30~8:45) の時間にて事前学習

通学路の安全確認を目的に全校児童による事前学習を実施した。地区ごとに分かれ、それぞれの通学路の危険箇所や楽しいスポット等を地図に書き込む作業を行った。

2月13日(水) 16:00~17:30 集団下校の実施

事前学習で確認した内容を踏まえて、集団下校を行った。卒園生の居る地区の児童と一緒に下校した。その他の地区の児童は集団下校をした。小学校職員も児童と共に下校し、危険箇所や楽しいスポットを児童と話しながら写真を撮るなどした。

実施当日スケジュール

15:55	保育園児が南小学校に集合	
16:00	オリエンテーション	

16:10	集団下校の実施	
17:30	事業終了	

2月15日(金)南小学校の朝の会(8:30~8:45)の時間にて事後学習

事後学習として実施を踏まえた上で、通学路の安全マップづくりに取り組んだ。撮った写真をプリントし、地図に貼った。

(3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について

地域内の大人の協力を得るために、どのような工夫をしたか。

- ・自然体験NPO学校が発行している定期村内広報誌(全戸配布)にて、実施案内を記載した他、小学校と保育園を通じて保護者に案内を配布して協力を仰いだ。
- ・行政主管の村内ケーブルテレビ広報にて実施案内を放送した。
- ・通学路の沿道にある民家に直接協力を依頼した。他

今回の活動において、指導者(スタッフ、ボランティア)をどのように確保したか

小学校と保育園を始めとした関係各団体・個人に活動の主旨についてご理解をいただき、連携して取り組むことができた。

今回の活動でどのような効果が出たか、また今後どのような効果が期待できるか

小学校教職員、保育園職員、自然体験NPOスタッフなどが、当日指導者及び安全管理者として一緒に歩いたことで、子ども達がどのような環境で過ごしているのかを知る機会となった。また、三者及び地域住民が、地元の子どもの安全確保や体験活動促進に協力する土台をはぐくむことができた。

(4) 安全面への配慮について

子ども達の通学における安全対策

- ・小学校や保育園における安全に対する学習を事前にした。
- ・地域住民に対して、活動実施の案内を行うと共に安全確保の呼びかけを行った。

保育園児への対応

- ・途中棄権の場合、車を一台用意して送迎できるよう備えておいた。

(5) 参加者、指導者の感想など

参加者の反応：参加者の感想、寄せられた声、アンケート結果など

保育園児：当日は朝から楽しみにしていた。小学校へ行った際、はじめは緊張していたが、

小学生のお兄さん・お姉さんに声をかけられて話す中で楽しく歩けた。

小学生：通学路の安全を再確認できた。保育園児はまだ幼く、危ないところを教えてあげることができてよかった。

小学校教職員：子どもがどんな道を歩いて登下校しているかを知ることができた。その中で自身も危険箇所を確認できた。

指導者の感想、期待など

子ども達がどのような環境の中で生活しているのかを知ることの必要性を感じた。ここから、何が課題としてありではどうすべきなのかの議論が話されるべきであると感じた。

また、小学校と保育園やNPOが連携する中で、それぞれの立場だから見えること・言えることがあると感じた。地域の大人の横のつながりを今後深めていき、地域の大人で地域の子どもを見守ってゆける環境を築いていきたいと感じた。

(6) 本事業の成果、今後の課題

- ・子ども達（小学生・保育園児）の安全意識の向上
- ・子ども間の交流促進
- ・小学校と保育園、NPO、地域住民との新たな連携

(7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて

次回に生かす具体的に出た反省事項

- ・時期が寒いので、温かくなってからの実施が良い。
- ・日程を調整して、例えば保育園児の一日体験入学の日に、連携構造を用いて同種の活動を設ける。
- ・1日だけではなく、年間を通した複数回実施も検討する。
- ・団体間の連絡など、連携構造について検討、強化する。

里棚田の夜なべ仕事人！「田圃から生まれるものは捨てるものなし」 ～古事記を紐解きながら～（徳島県勝浦郡）

(1) 事業概要

事業名：里棚田の夜なべ仕事人！「田圃から生まれるものは捨てるものなし」～古事記を紐解きながら～

テーマ：本事業は、徳島県上勝町の自然豊かな地域資源の有効活用と、自然体験活動による子どもたちの心身に健全な育成及び地域の高齢者の生きがいつくりにより、日本古来より、日本文学である「古事記」の一節を子どもたちにもわかりやすく紐解きながら、日本古来より現在まで受け継がれてきた「文化や歴史」と、今回のフィールドである棚田（田圃・農地）の「資源の循環」とを重ねあわせて、「棚田の夜なべ仕事：注連縄づくり・コモづくり等」の体験により、日本古来より続いてきた「自然環境と人の営みの関係」を体感することで、古典文学の中の新しい発見や、今ある地域の自然や環境の恵みに対する愛護や育成等の意識の高揚を促すことを目的とする。

開催日時：2007年12月9日（日）10:00～16:00

開催場所：檜原の棚田および竹中さんハウス（徳島県勝浦郡上勝町）

スタッフ：9名

参加者数：子ども10名 保護者10名

広報活動：教育機関へのチラシ配布等

参加費用：子ども500円・大人1,000円（保険・資料・昼食込み）

地域特性：本事業のフィールドである徳島県上勝町に位置する「檜原の棚田」は、日本の棚田百選の一つにも選定されており、現在、棚田オーナー制やワーキングホリデー等を活用した都市農村交流が実施されている。上勝町を含む徳島県の山間部は、古事記にも縁があり、農家に伝わる文化や歴史の伝承と、古事記の関わりについて、古事記の専門家等にも注目されている。また、上勝町は檜原地区のみならず、全国の中山間地域と同様に、過疎化・少子高齢問題を抱えている。持続的な地域づくりを目的として、里山の葉っぱを活用した「彩（いろどり）産業」の推進などを行っている。今後は、それに加えて、「都市農村交流」に着目した市民・行政・専門家等の連携による、自立的・持続的・地域づくりを目指したネットワーク構築に基づく、新たな視点での取り組みの必要性が要請されている。「上勝自然体験学習研究会」が事務局を務める「檜原の棚田村」という地域団体があり、棚田オーナー制やワーキングホリデーなどの受け入れにより、都市農村交流に積極的に取り組んでいる。この「檜原の棚田村」メンバーにより、一昨年、子ども達を対象とした体験活動が実施され、メンバーの地域に対する誇りや生きがいつくりが醸成しつつある。

主催：NPO 法人自然体験活動推進協議会

主管：上勝自然体験学習研究会

(2) 放課後活動事業のプログラムについて

	内 容
開催日時	2007年12月9日（日）10:00～16:00（集合9:30）
集合場所	上勝自然体験学習研究会事務局
開催場所	檜原の棚田および竹中さんハウス：徳島県勝浦郡上勝町生実
プログラムのテーマ	【古事記】の一節を紐解くことで、日本古来から引き継がれてきた【文化や歴史】と棚田の【資源の循環】を重ね合わせ、棚田の夜なべ仕事の体験により、【自然環境と人の営みの関係】を体感する
プログラムのねらい	① 古典文学を通して、現在に引き継がれている祭りの意味を知る ② 棚田の夜なべ仕事を体験し、田圃の資源の有効活用を知る ③ 田圃の資源の有効活用を知ること、【資源の循環】について学ぶ ④ 棚田の【資源の循環】を学ぶことで、上勝の食の恵みを知る ⑤ 地域の人との交流により自然と人の営みの関係や生活の知恵を学ぶ ⑥ 学校や家庭とは違った環境で、一緒に過ごす仲間や新しい友達との信頼関係を築き、新たな自己の可能性に気づく



古事記を熱く語る佐藤さん



佐藤さんの話に聞き入る参加者と地域指導者



地域の食材でお昼ご飯
（棚田白米と古代米が並ぶ）



親子でコモ編みに奮闘！
（手前の女性は地域の指導者：コモ編み器ごとに指導者を配置）



コモ編み完成！端をはさみで揃える



仕事人が作業をしながら昔話を語る

(3) 地域内指導者や大人の発掘、育成方法について

本活動は、日本の棚田百選の一つに選ばれている徳島県上勝町檜原の棚田において、棚田保全の活動を展開している「檜原の棚田村」（以下、「棚田村」と略記）のメンバーを指導者として選定している。

棚田村では、棚田保全のきっかけづくりの一環として、棚田オーナー制やワーキングホリデー受入れなどの取り組みを行っており、また、棚田村の会長および副会長は、数年前から、上勝自然体験学習研究会の子ども体験活動の指導者としても関わっているなど、地域資源をフィールドとした自然体験活動への感心が高まっている。

本活動では、棚田村の会長と副会長だけでなく、他のメンバーにも指導者として関わってもらうために、全ての棚田村メンバーの意向を伺って、指導者メンバーを選定した。

棚田村の会長と副会長が、今までにも子どもの体験活動に関わっていたことから、他のメンバーの参加も得られやすく、運営会議も、指導者メンバー全員出席で開催することができた。（写真参照）

活動プログラム（案）については、あらかじめ作成していたが、運営会議において、メンバーのできること、やってみたいことを再度確認し、メンバーの合意を得て、最終のプログラム作成を行った。

また、ここでは、部分的な指導をお願いするのではなく、全体のプログラムの流れを理解いただいた上で、その中のどの部分を指導するのか、またそれ以外の所では何ができるか



テーブルを囲んで意見交換する

といったことについても相互に意見交換を行い、指導内容を決定した。

そして、企画する側の人間には、地域の人々に一方的に指導をお願いするのではなく、地域の人が「できること」「やりたいこと」を相互の意見交換の中から引き出し、それが参加者である子どもたちの育成に役立つと判断できる内容を地域の人々と共に作り上げていく姿勢が必要である。

こういった地域の人々と企画する側の人間が、常に意見交換を行い、共に活動を組み立てることによって、地域の指導者の発掘や育成にも繋がっていくと共に、企画する側の人間にとっても、新しい企画の組み立てや地域の可能性の発見にも役立つしていくものと思われる。

(4) 安全面への配慮について

活動では、安全面についても地域の指導者と共に、危険な場所や作業中の注意事項に対する対応についての意見交換を行い、それらを指導者相互で共有するところから実施した。

危険場所については、全体管理者（上勝自然体験学習研究会が担当）が中心となって参加者の子どもたちに注意を促しながら監視をする体制づくりを行った。

また、作業中に発生すると思われる事故などについても、あらかじめ意見交換を行い、考えられるものを列挙して、それらが発生しないように注意を促すことや、万が一発生した場合の対処方法についても、指導者相互で共有し、対応できる体制づくりを行った。

また、参加の子どもたちの体調についても気配りできるよう、常に子どもたちの様子を観察することを心がけること等を指導者相互に確認した。

本活動の安全面の配慮として指導者相互に共有した項目とその内容と当日対応について下表に示す。

安全面の配慮について

項目	内容	当日の対応
危険場所の対応	<ul style="list-style-type: none"> 危険場所を指導者相互で確認・共有 指導者で管理体制を整える 	<ul style="list-style-type: none"> あらかじめ危険場所をこどもに伝える こどもが危険場所に近づかないよう監視する
作業中の対応	<ul style="list-style-type: none"> 縄なえの藁での怪我やコモ編み器使用中の怪我などを指導者で共有 	<ul style="list-style-type: none"> 作業前にこどもたちに注意を促す 救急箱を準備しておく
安全管理全般	<ul style="list-style-type: none"> 事前に参加者に健康調査票記入を促す 全員保険加入（参加者は、参加者負担で、こちらでまとめて加入） 緊急時の連絡先を確認・共有 	<ul style="list-style-type: none"> 健康調査票を確認する 子どもたちの顔色など、様子を観察する 指導者相互の安全についても確認する 万が一に備えて緊急連絡先を確認する

(5) 参加者、指導者の感想など

参加者の感想は、ふりかえりシートにより回答を促した。その概要と結果を下表に示す。詳細は、別紙「ふりかえりシートまとめ」に示す。また、指導者の感想等は、活動後のミ

ーディング時にヒアリングを行った。その結果も下表に示す。

ふりかえりシートの概要と結果

項目	内容	結果
実施日	2007年12月9日(日)	—
回答者／参加者 (回答率)	18名(子供8名・大人10名)／20名(90%)	
質問内容	問1：活動は楽しかったですか？	とても楽しかった : 3名 楽しかった : 13名 まあ楽しかった : 2名
	問2：活動はわかりやすかったですか？	とてもわかりやすかった : 2名 わかりやすかった : 10名 まあわかりやすかった : 6名
	問3：活動はためになりましたか？	とてもためになった : 2名 ためになった : 14名 まあためになった : 2名
	問4：一番楽しかったプログラムは？	棚田でアイスブレイク : 2名 古事記の話を聞こう : 4名 棚田の恵み(昼ご飯) : 3名 棚田の夜なべ仕事 : 8名 仕事人の話を聞こう : 1名
	問5：どんなところが楽しかったですか？ (自由回答)	棚田で遊べたこと : 2名 古事記の話が良かった : 4名 ごはんが美味しかった : 3名 夜なべ仕事をしたこと : 8名 仕事人のぞうり編み : 1名
	問6：知らなかったことを知ったプログラムは？	古事記の話を聞こう : 7名 棚田の夜なべ仕事 : 7名 仕事人の話を聞こう : 4名
	問7：どんなことを知りましたか？ (自由回答)	古事記の話 : 7名 夜なべ仕事のこと : 7名 仕事人の昔の話 : 4名
	問8：プログラムの中でもっと知りたいことは？(自由回答)	古事記に関すること : 9名 夜なべ仕事に関すること : 4名 仕事人の話に関すること : 2名
	問9：また参加したいですか？	是非参加したい : 3名 都合がつけば参加したい : 10名 参加してもよい : 5名

	問 10: 今回の活動以外で体験したいことは? (自由回答)	昔話 : 1名 佐藤さんの話 : 3名 山登り : 1名 棚田体験 : 5名 昔の遊び : 3名 たんぼの生き物 : 1名
	問 11: 講師やスタッフへのメッセージ	感謝の言葉 : 17名

指導者の感想等

外部指導者

- ・高齢者の生き生きした様子が良かった。
- ・上勝町の新たな良さを発見した。
- ・指導者と参加者の交流がよくできていた。
- ・古事記の話に感心を持ってもらえて良かった。

地域の指導者

- ・子どもたちと一緒に活動できて楽しかった。
- ・子どもたちの笑顔が嬉しかった。
- ・自分たちの知っていることを体験してもらえて良かった。
- ・古事記の話が興味深かった。

(6) 本事業の成果、今後の課題

本事業の成果、今後の課題として、①活動の成果、②活動が参加者に与えた効果、③活動が指導者に与えた効果、④活動を通して指導者相互に与えた効果、⑤今後の課題、について以下に示す。

活動の成果

- ・親子親戚等で構成する町内外から5組20名の参加が得られたこと。
- ・事故等がなく無事にプログラムが遂行できたこと。
- ・指導者および参加者が楽しく交流できたこと。
- ・指導者の指導により、コモ編み等が、参加者の手によって作られたこと。
- ・参加者からの生の声が、ふりかえりシートを通してまとめられたこと。
- ・子どもたちが身近にある里の豊かな自然を満喫しつつ、それとは違った街の自然の魅力を発見するという事業のねらいを達成できた。
- ・指導者にとっても「大人と子どもの視点の違い」への気づきを得られるなど、指導者にも成果をもたらすことができた。

活動が参加者に与えた効果

- ・古事記の話が、農家の夜なべ仕事と関係していることや、徳島の地名にも関わりを持っていることを知ったことにより、古事記が身近な読み物として理解されたこと。
- ・農家の夜なべ仕事が、昔はとても大切であったことが理解されたこと。
- ・農家の夜なべ仕事が、今の時代にも大切な知恵であることが理解されたこと。
- ・棚田（農地）の恵みによる食事が、人にとって有り難いということを再確認できたこと。
- ・棚田（農地）から生まれるものに捨てるものはなく、様々に活用できて、それが循環していることを知ったこと。
- ・活動により、コモ編み等の「もの」が作れたこと。

活動が指導者に与えた効果

- ・当日の活動だけでなく、運営会議への参加で、指導者が自分たちで「できること」や「したいこと」を自主的に考えられたこと。
- ・子どもたちとふれあうことで、指導者である地域の高齢者が元気になったこと。
- ・地域の指導者が有する生活の知恵が、子どもたちやその保護者に受け入れられるのを指導者自らが肌で感じられたこと。
- ・外部指導者の有する知識が、子どもたちやその保護者に関心を持ってもらえたこと。

活動を通して指導者相互に与えた効果

- ・運営会議への出席で、地域の指導者相互の意見交換により刺激を受けたこと。
- ・外部指導者と地域の指導者の協働により、活動がより充実したものになったこと。
- ・外部指導者と地域の指導者相互が、相互の得意分野を知ることによって刺激し会えたこと。

今後の課題

- ・地域の指導者の「できること」「したいこと」を抽出しプログラムに盛り込むこと。
- ・地域の指導者になる高齢者をより多く発掘すること。
- ・地域の指導者の力量を発揮できる場を多く設けること。
- ・地域の指導者として活動できる後継者を発掘し育成すること。
- ・PR広報を充実させること。

(7) 来年度以降も継続的に実施するための取り組みについて

本活動は、古事記と農家の仕事の関係や、古事記と徳島（特に上勝町周辺）の地名との関係など、地域の指導者による体験活動と古事記を繋ぐことで、指導者にも参加者にも、農家の仕事の価値を再認識してもらい、日本古来の古事記が農家の生活に密着した身近な書物であると共に、農家の仕事が、古から人の生活や環境に深く関わっていることにも関心を持ってもらう目的で実施された。

これは、古事記という歴史的な物語の紹介を活動に加えることで、農家の体験活動に、より幅を持たせる上でも、地域の指導者に、自分たちの地域の誇りを醸成する上において

も効果的であると言える。

今後も、外部指導者による知識を活動に加えながら、地域の指導者が、自分たちの地域に誇りを持ち、また自分たちの生活の知恵を誇りとして、子どもたちへの指導に活かされることが望まれる。

また、今後は、今回知り得た外部指導者による古事記の知識についても、地域の指導者がより理解を深め、農家の体験活動の指導のみならず、地域の指導者自らが自分たちの言葉で、地域に根付いた古事記の一節の語り部としても活躍できるようスキルアップを図ることが望まれる。

今回の活動により、地域の指導者全員が、古事記に深い関心を寄せており、活動後に、実際に古事記由来の場所を今回の外部指導者の案内で巡るツアーを企画している。地域の指導者が、古事記由来の場所を巡り、古事記と農家の仕事との接点や地名の成り立ちなどを現地で学ぶことで、自分たちの地域や生活を新たな視点で見つめ直す機会になることと思われる。そして来年度以降も、地域の指導者が、古事記の知識も踏まえた、生きがいある活動として「農家の夜なべ仕事」が実施できることに期待される。

自然体験活動を行う際の指導者の役割

1.1. 自然を理解する

私たちが自然を理解しようとする時、様々な環境と多くの生物、生物同士の様々なつながりが考えられますが、自然の中で連綿と営まれてきた人々の生活に根ざした伝統文化との関連も欠くことはできません。自然環境との共存・共生のため様々な生活の知恵や、独自の文化が生まれました。自然体験活動の種目は多種多様であり、それだけ様々な体験を提供する可能性を持っています。そのような可能性をもった自然を対象に、指導者として何をどのようにすればよいのか戸惑うことはありませんか。そんな時は、「子どもに対して、何をどう体験させたら楽しんでもらえるか」ということを考えることが第一歩となります。

まず皆さんが子どもの頃を思い出して見てください。自然の中でどんな体験を楽しんだでしょうか。田園で、畑で、草原で、里山で、河原で、海辺で、たくさんの自然体験をした事と思います。その体験は季節と係わり合いがあったはずですし、農事や祭事、食べ物など全てに反映されていました。現在は、スーパーの店先でトマトやキュウリ、ナスなどが一年中同じような姿と値段で売られていますが、かつては季節の食べ物はその季節にしか食べられず、祭事のときに食べる料理も、その季節に取れる野菜を活用して決まった料理がありました。

例えば3月から4月の頃を思い出してみてください。街では雛まつりの頃ですし、中山間地域では天神講や天神祭りが多くあります。静岡県の中中部では、4月はじめは天神さまの人形を最上段に、男の子や女の子用に用意した雛人形を段々に飾って、ノビルやワケギとタニシを和えた「ヌタ」を作り、三色の「ひし餅」を作って食べました。ひし餅は紅花の赤、クチナシの黄色、ヨモギの緑をそれぞれ餅に入れて色を出し、三段重ねや白を間に二段入れて五段重ねの菱形に切ったものです。クチナシや紅花は乾燥して保管できますが、ヨモギは野原に行き行って摘んでこなければならず、ノビルやタニシの採取とともに、子どもと年寄りの遊びを兼ねた大切な仕事でした。

さらに千葉県各地では6月になると「カボチャ饅頭」や「餡饅頭」、「味噌饅頭」などを必ずと言っていいほどよく作りました。採れたばかりの小麦粉を使って、早生のかぼちや餡や小豆餡、味噌などを入れた饅頭を作り「田植え」のおやつや「サナブリ」、「オヒマチ」などをご馳走として食べました。これはもともと麦の収穫祭である「新嘗（にいばし）」という行事食でもあったものが、一般化したものといえます。この季節は、脱穀した麦わらで籠や馬など麦藁細工も楽しみました。同じ材料を使っても、春の彼岸には晒し餡で「ぼた餅（牡丹）」を、秋の彼岸には粒餡で「おはぎ（萩）」というのも自然の季節感溢れる食べ物です。

食べ物の他にも、行事には自然の中の身近な材料を使った工作物（クラフト）もいろいろありました。正月の「門松」から始まって小正月の「繭玉（木綿花・成り木）」、地域の悪魔よけの「辻切り」の藁竜やお札を付けた笹竹、七夕の笹飾りなど、地域によって呼び名や形はそれぞれ異なりますが、1つ1つに意味や願いが込められていたものです。今は

消えてしまった行事もあるでしょうが、それぞれの土地と自然を見直す時、かけがえのない文化があった事を思い起こし、後世に伝えることも自然体験活動の指導者として大切な役割と言えます。

このように、季節と行事、その行事に連なる食べ物や遊び、作業など、皆さんの日常はほとんどが自然と直結しています。

1.2. 参加者の子どもを理解する

～事故を防止し、楽しく、安全な活動をするために～

参加者である子どもたちに安全にかつ楽しく、さらにより意義のある体験活動をしてもらうためには、指導者は子どもたちの理解に努め、子どもたちに対する配慮が重要になってきます。ですから、活動を企画し、実施する時は、参加者である子どもたちの年齢、性別、体力、活動当日の子どもたちの気持ちや体調などについて考慮した活動内容と指導が求められます。

指導者は以下の点について配慮して活動を企画、運営する必要があります。

1. 食べ物を扱う場合：アレルギー等の身体的な問題

代表的なものは食品に関するもので、乳製品、卵、そばなどがあります。また、動物・植物・昆虫などのアレルギーもあります。さらに、喘息、てんかん、といった病気や身体的・精神的な障害があるかもしれません。他に、病中・病後（怪我含む）の参加、寝不足、疲労の蓄積、乗り物酔い、朝食を食べていない等、その時の身体状況も把握する事も重要です。これらへの配慮が十分になされず死に至ることもありますから十分な確認を要します。これらのほとんどは、事前に情報収集が可能です。

2. 体力的格差

成長の度合いによる体格差、男女の性差、年齢による体力差も重要なポイントです。経験の差、参加意識（動機）、やる気を持ち方によっても子ども同士の格差が生まれますから、こういった事も考慮する必要があります。

3. 言葉かけに不用意なものがないように

事前に得た参加者の情報は、指導者全員が把握しておきます。例えば父親が亡くなった参加者に父親の事を話題にするとか、卵アレルギーの参加者に卵を残さないように言うてしまうなど、不用意な言葉をかけないように気をつける必要があります。

4. よい関係づくりへの努力

活動を始める時、集合時や、最初の顔合わせの時は、子どもたちと指導者、子ども同士の距離（身体的、精神的）は遠く、会話も弾みません。そのままでは活動もギクシヤクし、スムーズには進まないものです。この距離を短くし、雰囲気よく進めていくために、子どもたちと指導者、子ども同士の良い関係作りが大切です。そのためにも、指導者は積極的に働きかけることが重要です。楽しく過ごすことで子どもたちの体験の効果も上がります。

1.3. 安全管理と安全対策

自然体験活動は屋外で行われる活動が多く、自然環境における様々な危険をはらんでいます。そのため子どもたちが安全に活動をするために、安全管理と安全対策は必須です。現代の子どもたちにとって、自然体験活動は非日常的な活動だといっても過言ではありません。この点をきちんと認識する必要があります。

放課後子どもプランで実施する自然体験活動には、自然豊かな地域にある学校から自然にあまり恵まれていない学校まで、地域により様々な自然環境が考えられます。ここでは、自然体験活動を実施する上で一般的に考えられる危険因子について記載します。

1. 自然環境による危険因子

気象によるものとして、大雨、吹雪、雪崩強風、台風、落雷、地震などが考えられます。地震には山崩れ、津波、火災が伴い、大雨には河川の増水・洪水、鉄砲水などを伴う事も想定しておく必要があります。特に中山間地域には棚田、谷津など土地・地形を活かした場所が体験場所となります。そういう所では土手や畦が崩れやすい事も想定しておく事が重要です。また、田畑では日陰がないのが普通ですし、水の有無、集合・休憩場所の確保も重要です。体験する場所の把握に努めてください。また、人体に影響を及ぼすものとして、毒蛇、ハチ、ケムシ、クラゲ、ウルシ、キノコなど危険な動植物にも注意が必要です。

2. 生物的な危険因子

病気や怪我といった危険因子も考えられます。伝染性病原体や寄生性病原による疾病、食中毒、アレルギー、体調不良その他の疾病といった病気、すべる、転ぶ、ぶつかる、落ちる、切るといった怪我です。

3. 社会的、文化的な危険因子

最近多くなってきたものとして人間関係による危険、例えば人間関係のこじれなどによる精神的、身体的な危険があげられます。また、文明の利器である刃物や火、自動車や機械類などの様々な道具は、扱い方や利用の仕方によっては怪我や事故につながります。

4. 人為的な危険因子

主催者側や指導者側の過失も危険因子として挙げられます。無理な計画、未熟な指導者によって事故がおこります。また、事故にならなくても、「ひやっ」としたり「はっ」とする事が事故につながりますので、危険に対する十分な注意と意識、予知と回避の能力が必要です。

次に段階ごとに安全管理の方法をあげます。

●事前の安全管理

1. 企画立案段階

企画立案段階での危険の有無の確認は、活動の成否だけでなく、安否についてもそのカギを握っています。また計画書を作ることをおすすめします。きちんとした計画書がある事業は事故率も低いと言われています。

2. 計画書を作成する段階

最初に、誰に（対象者、人数）何のために行うのか、目的、ねらい、テーマの設定をし、それらについて指導者全員が把握し、最後までずれないようにすることが大切です。次に、組織、役割、指導体制を決めます。そうすることで活動場所、施設、活動プログラムが決まります。さらに用具、持ち物など準備するものや輸送手段が加わります。そして、緊急時の連絡体制、避難・誘導計画、医療機関・消防・警察・関係する行政機関の連絡先一覧や現場での関係団体の把握（協力体制）、保険の確認、募集・広報計画が加わります。

3. 実地踏査と事前打合せ

計画を終えたら、実地踏査と事前打合せを行います。その際は、「誰に、何のために行うのか」を、常に念頭に置いて実地踏査、事前打合せをしなければ意味がありません。そして、あらゆる事を想定して活動内容ごとに対策を立てるようにします。時期としては1ヶ月前くらいには最低1回、できれば実施直前に再度行うのが理想です。安全は危険の発見から、事故防止の第1歩は、危険を予知する事からはじまります。特に潜在的な危険を発見し、予め対策を立てておくことが「危険予知」「危険回避」といった安全能力を高めます。

4. 参加申し込み受付時

参加申し込みの時点で、健康調査票を一緒に提出してもらえば、子どもの健康状態、特殊な事情、緊急連絡先など、詳しい情報をあらかじめ入手することができ万が一の時に役に立ちます。

●実施中の安全管理

活動の実施中の安全管理とは、子どもたちが集合してから解散後、無事に帰宅するまでの間の安全をいいます。ですから、その間はあらゆる事を想定し、万が一の時の対策を考えておく必要があります。また、活動と活動の間や、活動場所へ移動するまでの道などでは気が緩みがちなので注意が必要です。

1. 参加者である子どもたちについて

指導者は、いついかなる時でも人数の把握ができていなければなりません。しかし、子どもたちにも自分の安全は自分で確保するという意識を持ってもらうために、自分で意識をしてもらう指導も重要です。

また、子どもたちの健康管理も重要です。活動の前後、最中には体調を確認しましょう。さらに、様々な子どもたちが参加するので、体力差、性差、年齢差、経験差、健康状態などをふまえた子どもたちへの配慮が常に必要です。

2. 自然環境の変化

自然の中での活動では、常にその環境の変化に気を配る必要があります。自然の状況は一時たりとも同じ状況にはありません。まずは気象です。天気の状態や寒暖により活動内容を変更したり中止したりする事を想定事項として考えておかねばなりません。活動場所についても、実地踏査において確認した危険箇所の状況が変化していないか再確認し、新たに危険箇所がないか再確認します。

3. 指導者について

どんな活動でも、参加者が少ない場合でも、原則的には1人で指導する事は避けるべきです。指導に集中する人、全体を見る人といった役割は最低限必要です。また、指導者自身の安全管理、健康管理も大切です。参加者の前では、自分自身を二の次にしてしまいがちです。自分自身と共に、他のスタッフの安全管理、健康管理にも配慮する必要があります。

●緊急時の対応

1. 緊急時の体制

緊急時の連絡体制（誰が指示をするのか、その指示はどうやって伝えるのか）、連絡先（医療機関、消防、警察、関係する行政機関）、避難経路や災害時の集合場所、現場での関係団体の把握（協力体制）、保険会社への連絡方法をあらかじめ確認しておきましょう。

2. 救助者の心構え

どんなに完璧な準備をし、注意を払ったとしても事故はおこりえます。そうした場合、生存者（指導者でも参加者でもありえます）の初動が重要です。初動いかにで被

害が最小限に抑えられるか拡大するか、また生命にかかわるような被害者を救出できるかどうかと、事態が変わってきます。

緊急時に気をつける事は、まずは冷静になることです。正確な判断ができないと場合によっては被害を拡大してしまう恐れがあります。次に自分自身の安全管理をすることです。大人や指導者は忘れがちですが、そのために二次災害を引き起こす可能性もあるので十分に注意が必要です。そして、事故者以外の人たちの安全管理をします。どうしても事故者に目を奪われがちですが、それ以外の人たちの安全管理を十分に徹底します。次に周囲の状況と事故者の様子を把握し、救助するか、協力者を得るかの判断をします。

3. 救急処置

救助する時は救急処置を施す事になります。この場合でも協力者をまず得ます。そして、事故者の様子からただちに処置すべきなのか、処置までに時間的余裕があるのかの判断をします。ただちに処置しなければならない症状としては心臓停止、呼吸停止、意識障害、大出血、やけど、服毒の場合です。

ここでは処置の仕方は省略しますが、適正な処置を施すにあたっては常にその場所が安全であるかを確認します。そして、救助者への感染防止のための処置（ゴム手袋など）を装着します。ただちに処置を施す場合は、最初に行った協力者を得る事が役立ちます。自分は処置しながら、協力者に救急車やレスキュー隊を呼んでもらえるからです。

救急処置後は、事故者の様態をチェックしながら保温をするなど、様態を悪化させないように注意します。この間に救急車やレスキュー隊が到着します。場所によっては救急車が入る事ができなかったり、救助者が搬送した方が早い状況もあります。その場合は救助者が搬送する事になります。

救急車やレスキュー隊に事故者を引き渡した、あるいは救助者が搬送した場合は専門医に引き渡した事故者以外の人たちが安全な場所へ移動できたなら、とりあえず一段落です。

4. 救急箱の準備と中身

活動時には必ず用意してください。箱の中身を常にチェックし、すぐに、誰でも使えるようにしておく事が重要です。何がどの位入っているのか、道具ならば使用方法、薬品類ならば処方の方法を入れておくに役に立ちます。

●事後の安全管理～あとで困らないために～

1. 自然体験活動の事故に対する法律について

自然体験活動中に人に怪我をさせたしまった場合、指導者であろうと参加者であろうと、また指導者がボランティアであろうと刑事法の責任（主に業務上過失致死傷罪-刑法209-211条）、民事法の責任（損害賠償）、行政上の責任（旅行業法、食品

衛生法、消防法、旅館業法など)といった3つの法律上の責任が生じます。

2. 自然体験活動に関する保険

傷害保険と賠償責任保険の2種類があります。傷害保険は、「急激かつ偶然な外来の事故」について支払われる保険です。賠償責任保険は、偶発的な事故によって他人の体を傷つけたり、財物を壊したりして、法律上の賠償責任を負ったことによる損害を補償する保険です。

保険でカバーできる範囲は、主催者・指導者自らの怪我や病気、参加者に負わせた怪我、参加者自らの怪我、参加者が他の参加者に負わせた怪我の4つです。しかし、全てがカバーされるということではないので、保険加入時に保険会社に尋ねてください。

1.4. 自然体験活動の指導時の留意点

自然体験活動の指導にあたっては、活動場所の様々な可能性を十分に生かした活動内容を以下の要素で組み立て、流れをつくることによって、より効果的な活動にすることができます。ここでは、どのように体験活動を企画、計画し、指導をするのか、留意点について、基本的な流れを説明します。

●活動の導入として ～活動の意味を説明する～

導入の仕方によって活動の成功が決まるといっても過言ではありません。これから行われる活動が、子どもたちにとってどんな意味を持ち、どういう影響を与え得るのかを伝える必要があります。この部分のよし悪しによって子どもたちのやる気が異なってきます。

「最初に難しいことをいうと子どもたちがいやになるから」といって、意味の薄いゲームや簡単な挨拶で済ませてしまうと、子どもたちの意識の低下を招く結果になってしまうことが少なくありません。最初に子どもたちの心をしっかりつかめるような工夫をしましょう。

●指導者と子どもたちとの人間関係作り

指導者と子どもたちとの人間関係作りも非常に重要です。「何かわくわくさせてくれる人だな」、「熱心に伝えようとしてくれているな」といった第一印象は、子どもと指導者との距離を一気に縮める近道といえます。状況や活動内容に応じて、名前覚えゲームや指導者についてのクイズなどは和やかな雰囲気づくりに有効です。また、指導者は、一方的に何かを教える存在ではなく、あくまでも参加者が興味をもったことを必要に応じて教えてくれるサポート役であることを認識してもらう必要があります。

●活動内容に関する説明は事前に

これから行う活動に対して各個人が準備することや気をつけることについて活動前にわ

かりやすく伝えておきましょう。特に危険に関する注意事項は必ず相手が理解できる形で伝えなければなりません。活動の手順と流れについても最初に説明します。

●グループ単位の協同作業を大切に

活動は基本的にグループ単位で行うのが理想です。体験内容によっては個人の活動もありますが、人数の把握や気づき、喜びをわかちあうにはグループ単位の方が有効です。参加者が子どもの場合、周囲への安心感が高まるほど学びの意欲が高まることから、子ども同士の人間関係づくりには細心の注意を払う必要があります。

●まとめの時間 ～主催側のねらいの達成度、子どもたちの満足度を測る時間～

ねらいのある活動である以上、そのねらいがどれくらい達成できたかを評価する必要があります。また子どもたちに体験からの学びを持ち帰ってもらうためにふりかえりの時間を設けることをおすすめします。方法は、アンケート形式や口頭で、発見と気づき、印象に残ったこと、帰ってから自分の生活に活かしたいと思ったことなどの質問を投げかけて行います。

●効果的な指導法

自然体験活動に適した指導法として体験学習法を応用した活動の運営が重要となります。体験学習法とは、参加者の学習要求に応じてデザインされ、その体験を素材にした学習活動の総称でのことです。人は経験することによって様々な学びが可能となりますが、とくに「今、ここ」に共有されている情報にもとづいて、自己、他者、それらのかかわり方、その場の「気づき」を通して学習（成長、変革）する教育方法のことをいいます。体験学習法の特徴は次の通りです。

- ① 学習目標（ねらい）を常に明確化し、共有化する過程を大切にする。
- ② 学習者の主体性を尊重する。知識伝授型ではなく学習者主体型を心がける。
- ③ 学習の循環過程（体験をする→経験を見つめる→経験を考える→体験を持帰るために概念化する）を重視する。
- ④ 教える者と学ぶ者の経験、学ぶ者と学ぶ者の援助的関係を深める。
- ⑤ 人間の尊重

1.5. プログラム（活動）のつくり方

自然体験活動を行う際、活動全体の目的（ねらい）を実現するために、活動内容と、それらをどのような順番で組み立てていくかを考えなければなりません。いろいろな活動がつぎはぎにならないよう、全体の目的や参加者の要求に合わせ、それぞれ活動を関連付けながら構成していきます。そのためには、プログラムを組み立ててゆく際の基本的な方針が不可欠であり、何を表現し、何を表現したいのかきちんと考えておきましょう。以下にプログラムを考える時に重要なポイントをまとめてみました。

●プログラムの「ねらい」は簡潔に

「せっかく集まってもらうのだから…」 「子どもたちにはいろいろな体験をさせてあげたい」。思いをもった人が活動を企画するのだから当然と言えば当然ですが、思いだけで作られたプログラム（活動）では事業の目的がぼやけてしまうことがあります。いくつものアクティビティを行うより、焦点を明確に絞ることで、目標や目的の達成を効果的に実現することが可能となります。アクティビティとはいわば「部品」のこと。アクティビティが適切な位置に配置されてプログラムという「製品」が組み立てられると考えれば、自然体験活動の目標の達成のためには、まずこのアクティビティ自体を上手に組み合わせることが重要となります。

●いつも学びが必要か

放課後子どもプランでの体験活動において、常に学びがなければならない、というわけではないと思います。子どもがはつらつと遊ぶ機会そのものが減ってしまっている今日では、遊びを主体とした体験活動も重要であり、それを事業のねらいとすることもあります。人とかかわりについては、事業のねらいや事業の規模と時間によっては、子どもたちが全ての人とかかわりを持たなくてもよいこともあるので柔軟に考えたほうがよいでしょう。

●活動現場の可能性を活用する

ねらいを達成するためには活動現場の可能性の活用が不可欠です。活動現場の可能性とは活動場所の人的、自然史的、人文的、生態学的、情緒的な特性をいいます。自然体験活動を行おうとする時、これらをアクティビティの素材として効果的に活用することで、学習意欲を高め、活動をより印象深いものにすることが可能です。

以下の要素を参考にして、自分の熟知している活動場所を改めて見直してみると、アクティビティを考える際のヒントがたくさん見つかるはずです。最近普及してきたネイチャーゲームやプロジェクト・ワイルドといったパックになったプログラム（パッケージドプログラム）もよいのですが、地域特性をよく理解した方であればそういったものに頼らなくても子どもたちを引き付ける面白いアクティビティが組み立てられます。シンプルな料理ほど素材の味が引き立つように、自然体験活動もよい素材を選ぶことが成功のカギといえます。

1. 自然史的な素材

里山の人気プログラムといえはまず先に「昆虫採取」が思い浮かびます。子どもたちが興味を示す昆虫や水生生物を素材として活用しない手はありません。活用例としては田植えの後に「自分たちで植えた苗が育つ環境にはどんな生き物が生息しているのか調べてみよう」と意味付けを行い、皆で水辺の生き物探しのアクティビティに繋がるといった具合です。昆虫の他にも以下のような自然史的な素材があげられます。
植物（樹木）／植物（草花）／昆虫（チョウやカブトムシ、ホタルなど）／両生類（カ

エル、サンショウウオなど) / は虫類 (トカゲやヘビ) / 野鳥 / 哺乳類 (痕跡) / 水生生物 (魚類も) / その他の動物 (クモ、環形動物など) / キノコなど (菌類、粘菌、変形菌) / 地質学的項目 (地質、地形、岩石、土壌等) / 環境の多様性 (池・湿地・川・林・草地など)

2. 人文的な素材

地域には、自然の様子を的確に言い表す方言が数多くあります。例えば、群馬県の旧新治村の人々はカブトムシのことを「まぐそ」と呼びます。動物の糞にカブトムシの幼虫がたくさんいることが由来です。子ども達にとってこれらの方言を地元の人から教わるだけでも大変な学びといえます。自然体験活動には人文的な素材が豊富にあり、人と自然との共存の叡智を学ぶにはうってつけの活動とすることができます。

方言の他にも人文的な素材として以下のようなものが考えられます。

歳時記の活用 / 地域の方言 / もととの地名 / 地域の自然とのかかわり / 人が活動していた痕跡 / 炭焼き跡 / 作業小屋 / 栽培植物等 / 歴史を感じるもの / 人工林と自然林 / 林の手入れのようす / 害虫と益虫など

3. 生態学的な素材

インターネットによる仮想的な情報を基にした調べ学習が増えている中、地域の人の生きた情報は子ども達にとって学習意欲を喚起するきっかけとなります。地域在住の方々を経験として知っている以下のようなことを、生態学的な視点から再認識することで自然保護にもつながるのではないのでしょうか。

林の遷移 / つながっているもの (生物どうしの環形) / 循環しているもの / 指標生物 / もととの自然のようす (人の手が入る前、いつ手が入ったか) / 共生しているもの / 食物連鎖 / 生物の生息地 / 植生区分など

4. 感性を刺激する素材

子どもたちの直接体験の不足が深刻化している昨今、自然体験活動はそれを補う絶好の機会といえます。例えば近隣の現場に移動する途中、指導員が何気なく手にとって子どもたちに勧めた木の実の味は深い記憶として長い間残るはずです。アクティビティという大げさなものではなくても、ちょっとした合間に子どもたちの感性をくすぐる材料を知っている指導者はたくさんいるのではないのでしょうか。ぜひ一度、日常何気なく見ているものや感じていることを整理して体験活動の素材にしてほしいと思います。

味わえるもの / さわって面白いもの / 匂いのするもの / 面白い音・見て面白いもの / 季節を感じさせるもの / 四季のようす / 数や形・色に関するもの / 方位 (方角) を感

じられるもの／測れるもの／雨の時にいかせるもの／法則性を感じるもの／デザイン的に面白いもの（模様）／繰り返し言葉にあうもの／太い木／ぶらさがれる木／登れる木／不思議なもの／感動できるもの／面白いもの（形、動き等）／気持ちがいい場所／神聖な場所／「気」の強い場所／畏敬を感じるもの・場所／今だから楽しめるもの／昔から変わった（変わった）もの／今後変わらないもの（変わるもの）

5. フィールドの環境を考慮したプログラム運営

素材にも増して重要なのは活動場所の環境です。当日の道、トイレの位置、説明ができる広場、危険箇所など、一步間違えれば子どもたちを精神的にも肉体的にも危険にさらす可能性があるだけに「いつもよく知っている場所だから…」 「まあなんとかなるさ」といった慢心は捨てなければなりません。指導者が経験的に身につけている暗黙値の部分を活動に反映させることで、快適で学びの大きい活動になります。

標高／斜面の向き／周辺の地形や環境／日没・日の出の時刻／月齢（月の出の時刻）／潮の干満時刻／活動時刻と太陽の位置／地形（なだらかな場所）／活動できる状態か（平坦さ、林床のようす）／活動の制限（保護との絡み）／広場があるか（広さ）／適当なルート／ストレス要素（音、蚊、砂利、ぬかるみなど）／地面のようす／環境の影響の少ない場／雪の量／昼と夜の温度／季節風のようす／雨天時に逃げられるか／川野上流・下流のようす／川に入れるか（川遊びができるか）／展望／開けた場所（星が見られるか）／便所／施設とフィールドとの位置関係／法規制の有無／人の出入り（活動時に関係者以外がいるかどうか）／使用料がかかるか／携帯電話が通じるか／火が使えるか／自然物を採れるか／道具の持ち込みが容易か／管理者の人手／配布できるコースマップ／コースに指導標があるか／飲み水があるか